

国内経済情勢

概 観

公定歩合引上げ後、株価が下落し、繊維市況がさらに軟化を示すなどの動きがみられたが、実需の根強さを映じて商品市況は総じて堅調を持続しており、景気はなおかなりの速さで上昇している。この間、消費者物価はいっそうの騰勢を示している。

金融面では、引締め強化に伴いコール・レートがさらに上昇し、また銀行の融資態度はしだいに抑制色を強め、貸出金利も上昇に転じた。

一方、3月の国際収支は貿易黒字幅の縮小、資本収支等の大幅流出超から巨額の赤字となり、外貨準備高は3月に引き続き4月も著減した。

3月の生産は大幅増加

3月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は前月比+2.7%と再び大幅な増加を示した。財別にみると軒並み増加しているが、中でも資本財(大型機械、自動車等)の伸びが著しい。この結果、1～3月の前期比増加率は+6.5%と10～12月の伸び(同+5.3%)をさらに上回った。

一方、3月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は前月比-1.0%と久々に減少した。これは前月著増した船舶の反動減による(船舶を除けば前月比+0.2%)ほか、鉄鋼、自動車、テレビ等一部品目の輸出向け出荷が早積みの反動を主因に著減したことも響いている。当月の動きを財別にみる

と、資本財輸送機械のほか、消費財も減少したが、反面、一般資本財、生産財は増加した。なお、1～3月では前期比+6.5%の増加(10～12月同+5.3%)となった。

3月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は上記のような生産、出荷動向を映じて、前月比+0.4%と小幅ながら半年ぶりに増加し、生産者製品在庫率指数(季節調整済み、速報)も89.5と前月(88.3)比いくぶん上昇した。

設備投資関連指標の動きをみると、まず3月の一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前月比+5.7%と著増し、品目別にみても、製造業設備投資関連機種(金属工作機械、圧延機械、化学機械等)の増加が目だった。一方、3月の機械受注(船舶を除く民需)は例年期末月にみられるほどの急増を示さなかったため、季節調整後では前月比-11.7%と減少した。この結果1～3月の前期比増加率(季節調整済み)は+11.7%の増加となり、4～6月期もほぼ同様の伸びが見込まれている。

また、3月の建設工事受注額(季節調整済み)は民間産業分、官公需分とも前2ヵ月著伸のあと前月比それぞれ-11.1%、-4.7%と減少したが、これには、未消化工事高の急増を背景に建設業者の一部が受注手控えないし選別態度を強めたことも響いているとみられる。

3月の労働関連指標(季節調整済み、速報)をみると、ここ数ヵ月急速な上昇を示した有効求人倍率は1.64と前月(1.67)比さすがに小反落したものの、その水準はきわめて高い。また、名目賃金

(全産業、季節調整済み)も前月比+1.0%と引き続き増加した(前年同月比では+16.1%)。

3月の全国百貨店売上高は、商品値上がりや一部買急ぎ傾向などを映じて一段と伸び率を高め、衣料品および雑貨を中心に前年同月比+30.0%と、30年以降では最高の伸びを記録した。

商況の地合いは堅調

4月の商品市況をみると、外材が続落し、鉄鋼(条鋼類、鋼板)も前半上伸したあと後半に至り緊急増産等の措置により小反落ないし上げ渋ったものの、セメント、非鉄が続騰し、化学品、石油製品も強含みに推移するなど総じて堅調な地合いを続けた。この間、定期市場取引規制等から前月来すでに反落気配を示していた繊維市況は公定歩合引上げ後下げ足を速めたが、後半には下げ一服きみとなった。

卸売物価は3月前月比+1.9%と著騰のあと、4月にはいって上、中旬とも-0.1%と久々に反落したが、下旬には再び+0.5%と上昇し、月中平均では前月比+0.5%となった(前年同月比+11.4%)。4月の動きを類別にみると、繊維製品、製材・木製品の下落のほか非食料農林産物(原木、羊毛等)が反落したが、一般・精密機器、窯業製品、化学製品等は上昇を続けた。

4月の消費者物価(東京、速報)は被服、食料、住居等各費目とも大幅値上りを示したため、前月比+1.8%と続騰し、前年同月比の上昇率は+10.1%にまで達した(季節商品を除く総合では前年同月比+9.7%)。

銀行貸出金利は反騰

4月の金融市場では、まず財政資金対民間収支は、外為会計の大幅揚超や長期国債の繰上げ発行があったため、一般財政の払超が前年を大幅に上

回ったにもかかわらず、2,027億円の払超と前年(同1,300億円)を若干上回る規模にとどまった。

一方、銀行券の発行超は1,085億円と前年(同828億円)を上回り、「その他」勘定と合わせた月中資金余剰額は701億円(前年同433億円)となった。これに対し、日本銀行は主として買入手形の売戻しにより調整した。この間、コール市場の需給地合いは準備預金積増し需要や外為会計の揚超などから引き締まりぎみに推移し、コール・レートは公定歩合引上げに伴い月初0.375%の上昇をみた。その後、27日にはさらに0.125%上昇したが、更月後5月2日、同率の低下をみた(無条件物出し手レート5.875%)。

4月の銀行券平均発行高は前年同月比+27.5%(沖縄を除くと+27.0%程度)と高水準を持続した。また、3月のマネー・サプライは、財政資金の支払増による預金通貨の増勢から前年同月比+29.0%となった。

3月の全国銀行貸出増加額は14,640億円、前年同月比+21.1%となお高水準ながら伸び率はいくぶん鈍化した。都市銀行の融資態度は一段ときびしくなり、その他各業態でも貸出の伸びはしだいに落着き傾向を示しつつある。他方、中小企業金融機関の貸出は総じてなおかなりの増勢を示した。

3月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中0.005%の上昇と、45年10月以来29ヵ月ぶりに上昇に転じた。これは主として都市銀行の金利が融資抑制方針等から若干上昇をみたためである。なお、地方銀行では低利の地方公共団体向け貸出の増加等を映じて引き続き低下をみた。

4月の公社債市況は、1～3月にみられた急速な軟化のあと、短・中期ものの中にはさすがに下

げ一服を示すものがみられたが、長期もの中心に引き続き弱含みに推移した。こうした中で、5月以降発行の国債・政保債・金融債等の発行条件が改訂されたほか、事業債についても4月債に引き続き第2次の発行条件改訂が行なわれることとなった。一方、株式市場では、金融情勢の変化等に対する不安感に加え、証券業界の営業姿勢自粛方針もあって薄商いに終始し、相場も月中かなりの下落となった。

3月の国際収支は大幅赤字

3月の国際収支は、貿易収支の黒字が輸出の減少や輸入の著増から大幅に縮小したほか、資本収支等の流出も多額にのぼったため、総合収支では過去最高の1,091百万ドルの大幅な赤字となった。貿易収支を季節調整後でみると、輸出がこれまでの早積みの反動や船舶引渡しの著減などから前月比-15.9%と落ち込んだのに対し、輸入は原料、一般消費財等が引き続き増加したうえ、濃縮ウランの緊急輸入も加わって前月比+19.8%と著増したため、収支じりでは88百万ドルの小幅黒字にとどまった。

3月の輸出を通関ベースでみると、前年同月比+17.0%(邦貨表示額では同+1.1%)と前月を大きく下回る伸びにとどまった。品目別には、光学機器等は高い伸びを示したものの、船舶の大幅反動

減のほか、自動車も伸び悩み、二輪自動車、綿織物は引き続き前年実績を下回っている。地域別には、東南アジアや中近東向けが伸長したものの、米国向けはほぼ前年実績並みにとどまった。先行指標である輸出信用状接受高(季節調整済み)は、2ヵ月連続増加のあと4月は前月比-3.2%と減少した(前年同月比では+25.7%)。

3月の輸入(通関ベース)は前年同月比+38.0%(邦貨表示額では同+19.3%)と水準を高めた。品目別にみると、鉄鋼原材料が国内粗鋼生産の上昇を映じて大幅な増加を示したほか、輸入価格高騰の影響もあって羊毛、木材、肉類等が引き続き増加し、一般消費財も高い伸びを持続している。地域別には、米国からの輸入が高水準を続けているほか、東南アジア等からの輸入もさらに伸びを高めた。

4月の外国為替市場では、インター・バンク米ドル直物中心相場が基準相場比おおむね16%前後の円高で終始し、先物ディスカウント幅は縮小傾向をたどった。

外貨準備高は、3月に引き続き4月も1,291百万ドルと大幅な減少を示し、月末残高は16,834百万ドルとなった。

(昭和48年5月11日)